

派遣者番号	31K04	氏名	小松 千草
研究主題 —副主題—	学びに向かう力を育む授業の創造 —目的と見通しをもち、自己効力感を高めながら学ぶ総合的な学習の時間の単元開発と実践を通して—		
派遣先	帝京大学 教職大学院	担当教官	中田 正弘
所属	町田市立鶴川第二小学校	所属長	鈴木 明子

キーワード：学びに向かう力 自己効力感 総合的な学習の時間

1 研究の目的と問題の所在

(1) 目的

本研究は、「学びに向かう力」の育成に着目し、児童が学習の目的と見通しをもち、自己効力感を高めながら学ぶ授業の在り方について、総合的な学習の時間の単元開発と実践を通して実証的に明らかにすることを目的とする。また、その過程では、育成が期待される「学びに向かう力、人間性等」の背景やその内実について、中央教育審議会の議論やOECDの研究報告等を基に明らかにしていく。

(2) 問題の所在

平成29年告示の学習指導要領(以下「新学習指導要領」という)では、学校教育を通じて育成すべき資質・能力が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で示されている。その中の一つ、「学びに向かう力、人間性等」については、他の二つの柱をどのような方向性で動かしていくかを決定付ける重要な要素であり、社会や生活の中で児童・生徒が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力であるとしている。このように、資質・能力の育成に重要な役割を果たし、かつ、その後の生活に生きて働く「学びに向かう力、人間性等」の育成は、今日の教育において重要な課題となっている(例えば、2016無藤など)。

しかし、その一方で、これらは「知識及び技能」とは異なり、どれだけ習得できたのかを数値化することが難しいため、どのように育成し、どのように評価すればよいのか、教育現場ではその重要性を理解しながらも模索が続いているのが現状であり、実際のところ、学校現場でどのように実現できるのか、まだ不明瞭な部分や課題があるのも事実である。

2 研究の内容・研究の方法

この研究目的にアプローチするために、以下の四点の課題に取り組む。

- ① 「学びに向かう力」が重視される背景と定義
- ② 先行研究の整理
- ③ 児童の学習活動に関する実態調査
- ④ 総合的な学習の時間の単元開発と実践

②と③より明らかになったことを基に、リサーチクエスションを設定し、それを明らかにするため、④に取り組む。

(1) 本研究における「学びに向かう力」の定義

新学習指導要領やOECDの「Education2030」や「社会情動的スキル」に示されたものから、本研究では「学びに向かう力」(図1)があるとは、「自己の感情や行動を統制する能力」、「自らの思考の過程等を客観的に捉える力」を育成することで、「主体的に学習に取り組む態度」が高まった状態であると考えられる。

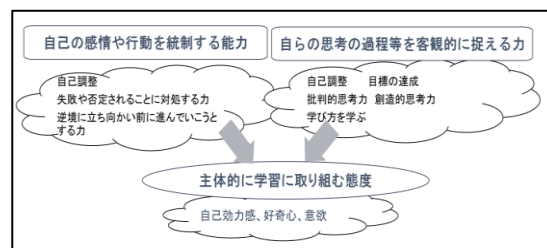


図1 本研究における「学びに向かう力」の定義

(2) 先行研究より明らかになったこと

長沼(2011)、古賀(2006)、杉本・古井(2017)、山本(2012)らを参考に、本研究にかかる先行研究を検討した。結果、以下のことが明らかになった。

- ・自己効力感と実際の態度の間には乖離があることがある。
- ・学習過程にメタ認知を促す振り返り活動を行う効果は実証されているが、メタ認知的知識の「設定・点検」以外の因子にはほとんど関与しない。「困難理解・見通し」、「成功理解」の因子の関与が課題となる。

- ・自己効力感についての、教育実践の観点からの研究の蓄積が少ない。
- ・「学びに向かう力」についての研究実績が少なく、今後に期待されている。

(3) 実態調査

児童の自己効力感の高低や学習動機、メタ認知的学習行動の傾向を明らかにするため、公立A小学校の第5学年98名、第6学年90名を対象とし、質問紙による調査を行い、次のような傾向が明らかになった。

- ・失敗への恐れや、つまずきへの対処法が分からない。
- ・「同一化的調整」の学習動機の値は高く、「内的調整」の学習動機の値は低い。
- ・学習の際、自分の資質・能力に目を向けていない。
- ・自己効力感低群は、自律的学習動機の内的調整、同一化的調整の値が低く、メタ認知的学習行動においては、特にその差が大きい。

(4) リサーチクエストの設定

先行研究及び実態調査を基に、リサーチクエストを設定した。

- RQ1** 学習者が学習への目的と見通しをもち、自ら選択・判断・実行が可能な学習過程を用意するとともに、その過程を学習者自身が振り返り、改善する活動を可能にすることで、メタ認知的学習行動が向上し、学びに対する自己効力感の獲得につながる。
- RQ2** 学習者に対するコンサルテーションとガイド機能、適切な評価とフィードバックを重視した教師の活動が、学習者の内的な学習動機を高め、自己調整能力の向上を支える。

(5) 単元開発・授業実践

① 授業づくりの視点と単元開発

先行研究及び実態調査結果などを詳細に検討し、美馬（2005）らの学習デザインの知見を活用し、授業づくりの視点を設定した。

- ①学習過程：単元導入では、豊かに学習対象と出会い、真に取り組みたい課題や目標、楽しみを見だしていける場面を設定する。また、課題解決のための計画づくりを丁寧に実施するとともに、学びの過程の振り返りを通じて計画を吟味・修正できるようにする。
- ②過程と成果のフィードバック：単元の具体的な評価規準を整え、教師と児童で共有し、単元の終末では、身に付いた資質・能力を実感できるようにする。
- ③学習の環境、ツール、活動：学習内容に応じて、学びのスペース、ツール、活動等を児童自身が選択・判断し、活用できる環境を整える。
- ④教師：学びの質の保証のために、教師は、コンサルテーションとガイドの機能を重視するとともに、学びの過程や成果に対する評価（フィードバック）を適切に行う。

② 単元開発と授業実践

授業づくりの視点を生かし、第6学年総合的な学習の時間、「私らしくあなたらしく」（全35時間）の指導計画を立案・実践することで児童の変容を分析し、その効果を検証した。

3 研究の結果と考察

実践に基づく児童の変容をできるだけ多角的に捉えるために、「授業記録」、「ワークシート記述」、「実践後の質問紙調査」、「対象児童へのインタビュー」、「担任へのインタビュー」の五点の方法でデータを収集し、分析を行った。ワークシート記述と質問紙調査結果を報告する。

(1) 授業で用いたワークシートの分析

1回目の活動後と2回目の活動後のワークシートを比べてみると、交流会を2回行ったことや、自分のよさや力を伸ばすために学習しているという目的を意識させたことが、学習過程や学びの成果をメタ的に捉えさせることにつながった。また、「ルールや遊び方を分かりやすくしたので、相手が困っていなかった」など、自分の行為と結果を結びつけ、要因を考えるなど、学習方略を自覚した表現が増えていった。

(2) 授業後の質問紙

第2次までの授業後に行った質問紙調査の結果を見ると、自分に変化があったと答えた児童が1/3程度おり、積極性や粘り強さなどの高まりを実感していたことが伺える。

4 今後の展望

学習者が学習への目的と見通しをもち、自ら選択・判断・実行が可能な学習過程を用意するとともに、その過程を学習者自身が振り返り、改善する活動を可能にしたことで、学びの責任を学習者が自覚し、メタ認知的学習行動が向上した。また、それに伴い、得られる達成感や満足感が高まるとともに、自らのどのような行為、行動が結果に結び付いたかを考えることで、自己効力感の向上に寄与することが示唆された。また、教師の学習者に対するコンサルテーションとガイド機能、特に評価とフィードバックを重視した教師の活動は、学習者の自己効力感の向上や内的な学習動機を高め、自己調整能力の向上を支えることにつながった。

しかしながら、自己効力感は失敗やつまずきで一気に下がってしまうことも明らかとなった。結果をどう捉え、またそれをどう乗り越えるのか、その方略の獲得が必要で、教師のコンサルテーション機能を高めることや、学習者のレジリエンスをどう高めるかについての研究を深めていくことが必要である。

本研究で成果のあったものは、今後、他教科にも適用するとともに、課題については今後も研究を継続し、改善に努めていきたい。